

袖返す戀でした

艶けしのマスク姿の世相、長い巢ごもり、ふと頭をよぎる、遠つ世への手土産に三文歌詞に手を染めた。年女の有終の美か、曲を付けたらと欲は膨らみ、立ち止まり、誰

に依頼しようか思いあぐねた。ふと、そうだ、新現実同人の茨田晃夫氏の文の一節を思い出し、厚顔無恥も省みず手紙を認めた。忘れていた春三月、丁寧な返事が届き、作詞作曲のコラボが始まった。♪恋はするほど艶が出る♪と昭和に流行った歌だ。私の文学の師は詩、句、小説にしる艶と色気がないと駄目だと宣うた。それ故か私の作品は艶っぽい色気があると、目尻を下げ評される。私もたおやかに笑い返す。九州文学にも一人位艶っぽい作品を書く同人がいてもよいのでは。私の自惚れか。

自惚れは増長し、お会いしたこともない同人茨田晃夫氏の胸に矢は放たれた。同人とは有難いものだ。東京で書き手として、又ギター演奏に長け各方面で大活躍中の人物だ。私にはまさに、紅い絆の同人で、私の夢が実現して、曲が付きCDまでに仕上がった。全て作曲者の手作りとは、何と天は二物を与えずと云われるが、二も三も与えた天に驚いて恭しく最敬礼。せつせつと唄う恋心、日常茶飯事に生れた大人の恋歌である。せつない余韻の残る歌、ギターの響、過去も未来も恋心である。せめて老いても心の若さは保ちたい。心の若返りの一服に、サーー恋（濃）茶をどうぞ!!

おぼろ夜の滾る想いを畳みけり

（倫）